



会員近況

東京工業大学大学院総合理工学研究所
システム科学専攻

中野 文平

現在(一般)システム理論を研究しており、応用分野として社会システム、組織システムを考えています。いま現在は、われわれは複雑なシステムをとらえるとき「多面的な見方をし、それを統合して全体を見る」ということをやりますが、こうしたシステム論的な認識行為に対する理論的基礎づけ、いわばシステムズ・アプローチの基礎理論といったものに関心があります。最近研究室でチェックランドのソフトシステム方法論を学生とともに読み、いろいろな意味で有益であると考え、翻訳出版することにしました。彼がいうには、人間を含んだソフトシステムに対し、本来ハードシステムに対して開発されてきたSEやORを適用してもほとんどうまくゆかないという反省と努力の中から新しい方法論は生まれたとしている。ORが有効な領域は比較的ハードなシステム(人間の要素が主要素をなさないシステム)だが、経営・組織の問題はソフトシステムに属するものが多く、ORの限界という話もそのへんにある。モデルの建てにくい経営問題を扱っている人々にとって一読に値するのではないだろうか。

大阪府立大学計算センター 西村ミチコ

もしまえの好奇心と計算センターという間口の広さから、なにごとにも浅くみじかくおつきあいしてきたようです。ふりかえて何ひとつこれといった蓄積もなく、ようするにふりまわされているということでしょうか。昨年は発展途上国の産業連関表問題に首をつっこみ、学会のお世話をいただいてIFIPに出席いたしました。おかげさまでORの世界にも知己を得、喜んでおります。

当大学の計算センターは開設以来15年、工学部の庇をかりつづけてきましたが、「独立の建物を」という念願が今年やっと陽の目をみそうな機運になりました。もっか、名実ともに「たてなおし」のため、あるべき機能、

ハードウェアシステム、はてはフロアプランまで、山積する課題ととりくんでおります。こういう事態へのORのアプローチ? コンピュータはこのさいあまり役にたってくれそうにもありません。

電電公社東野電気通信研究所 基幹交換研究部トラヒック研究室 阿部 威郎

現在トラヒック測定およびトラヒック予測の仕事にたずさわっています。本年9月には、世界に先がけて、三鷹でINSモデルシステムの壮大な実験が開始されます。ニューメディアに対する期待も日増しに高まってきており、INSにかかわる者として喜ばしいかぎりです。モデルシステムでは、当研究室で開発したトラヒック測定装置を用いて、きめ細かな測定を行なう予定です。これによって、各種新通信サービスの利用方法や使用量(トラヒック)を正確にとらえることができますので、今後のトラヒック予測に反映させていきたいと思っております。

デジタル通信方式が採用されることにより、長いあいだトラヒック研究の中心であった通話路研究は、その座を待ち行列研究にゆずりました。INSが全国に広がるまでの長いデジタル-アナログ併用の過渡期こそ、トラヒック測定と予測のトラヒック管理研究が中心になるのではないかとそぶきながら、細々と研究を行なっています。

日本電気技術情報システム開発(株) 第2開発部 酒巻 恒一

私が、本学会誌に論文を発表してから、10数年たちました。当時OR関係の仕事もしていましたが、日本電気の大規模計算機のオペレーティングシステムACOS-4の開発が急務となったことから、その仕事にたずさわりました。昭和55年頃になると盛んにソフトウェアの危機が叫ばれるような時代になってきましたので、日本電気もソフトウェア生産技術研究所を設立しました。そこで、その研究所で、ソフトウェアの品質管理を中心にソフトウェア管理技術の研究開発にたずさわりました。昭和56年秋、現在勤めている会社が日本電気の分身会社として設立されましたので、日本電気を定年退職して、この会社に移りました。

この会社は、日本電気の技術の中核である研究開発グループ(中央研究所)や生産技術開発グループのソフトウ

ウェアシステムの受託開発を行なうとともに、日本電気グループ全体にコンピュータサービスを行なっています。仕事の内容にOR関係が多くなったので、最近では、(1)スーパーコンピュータ、(2)知識工学、(3)生産システムの問題と動向(特にCAD/CAM)、(4)TQC/CWQC、(5)中小企業とOR等の特集号を読ませていただいています。今後とも本誌を活用し、ORの動向を把握しながら業務を遂行したいと思っています。

協和醸酵工業 システム部 岡田 英明

私がORをはじめたのは40年代のはじめで、ようやく汎用コンピュータが企業に普及したところである。当時、ORを教えてくれた諸先生たちがこぞって言われたのは「ORとは、問題を発見することが重要であるところの学問(技術)である」ということであった。問題解決の技術を中心とした教育を受けてきたわれわれにとって、このことは大変目新しく感じたものである。ORの諸先生の薫陶を受けて以来、企業の中での仕事に対する目がかわり多くの問題と遭遇することになった。企業の中で発見される問題は、ORの教科書にでてくるような形の問題ばかりとはかぎらない。また、問題は解決されなければならないので、この問題はORの範疇ではありませんと投げ出すわけにはいかないばかりでなく、さらにタイミングを逸した解決案などは紙くずのようなものである。

こうした状況のなかで、企業の中にいるORマンは、「ORよ、どこへゆく」などとなげいているひまなどないのである。ところが、ORワーカーのジレンマ、IEワーカーのジレンマ、DP部門SEのジレンマと似たような環境の人たちの泣きごとが雑誌の話題として絶えないのは不思議に思えるのである。何年か前に、当学会誌を、読むに値するレポートなど1つもないと決めつけた大学研究者がいたが、私にはそう思えないのである。待ち行列の理論や数理計画の理論だけがORのレポートではない。

ORは、従来の学問がもつテリトリーの常識をはるかに超えた対象をもっている。それを、自分の狭い研究のわくの中で云々するのは当らない。2000人という小学会ではあってもORが活きる世界は、他学会にはないほど広いのではないだろうか。

日電公社武蔵野電気通信研究所 澤井 宗雄
交処室

本年2月までは、ファクシミリ通信等の新サービス関連のトラヒック設計にたずさわっており、ORにも関係する内容でしたが、人事異動により研究室が変わり、現在は交換用のソフトウェアの生産環境の整備・向上に従事しています。

今後、情報化社会の進展にともないソフトウェアの重要性がますます増大し、その開発規模も大きくなってきます。このため生産性の向上をねらいとして、特に設計・試験のフェーズでのファイル管理の効率化、試験の自動化等の支援システムを構築しようとしています。まだUNIXの下でC言語を用いて交換機とワークステーションとの通信をサポートする第1段階ですが、さらにワークステーションでのマンマシンインタフェースの改善をめざして、各種管理用ツールの提供、画面上での使いやすさの向上等が必要となり、総合的な生産環境の完成時には、ワークステーションの配置、応答時間等の最適化等の問題が派生すると思われるので、その時にはOR的な手法も適用したいと思っています。

九州電子
金属加工部加工技術課 村上 辰男

6月1日付で現在の職場に配転となり、九州佐賀の地へやってきました。8年前、住友金属工業へ入社し、大阪の製鋼所に配属になって以来、電気炉操業管理システム・リングミル圧延制御等の鉄関係の仕事から一転してシリコン関係の仕事へ移り、感覚を入れ替えるのにひと苦労でした。トンで物を言っていたのがグラムに、mmオーダーからμオーダーに、また清浄度の管理や汚染防止対策に考えられないような多額の費用をかけている。知るごとに驚きを感じました。現在は、現場実習を通じて、操業・設備・工程等の勉強をしている段階です。

佐賀へくるまでは、大阪近郊から離れたことがなかった私で、当初は環境の違いに驚いたのですが、1カ月住んだ今では住めば都、寮生活だが結構楽しく暮らしております。こちらは魚は美味しいし、食物は安く、住みやすいところですよ。

九州電子は社員の平均年齢が25歳という若い、活気に満ちた会社で、シリコン業界ではトップクラスの技術力をもっており、新しい仕事に意欲を燃やしているこのごろです。

会合記録

()内は出席者数
モニター委員会 7月3日(火)(2)
編集委員会(OR誌)
7月4日(水)(10)
普及委員会 7月5日(木)(6)
庶務幹事会 7月10日(火)(5)
表彰委員会 7月12日(木)(8)
研究委員会 7月13日(金)(6)
理事会 7月20日(金)(18)
秋季大会シンポジウム打合せ
7月24日(火)(6)
三学会協議会 7月27日(金)(9)
IAOR委員会 7月31日(火)(2)
第2回理事会議題 (59.7.20)

1. 庶務関係

1-1 第1回理事会議事録承認の件

1-2 支部長会議の報告

1-3 入退会の件

2. 研究普及関係

2-1 第12回シンポジウム(案)

2-2 秋季研究発表会の件(実行委員・予算)

2-3 春季研究発表会決算報告(北海道支部分)

2-4 定例講演会・セミナー開催の件

3. 会計関係

第1四半期収支計算報告書

4. 表彰関係

表彰委員会委員委嘱の件

5. 公的問題

5-1 学術会議関係

5-2 経営工学関連協議会(FMES)関係

5-3 著作権問題について現状と見直し

6. 国際関係

6-1 IFORSの件(日本代表と議題)

6-2 視察団派遣の件

6-3 AFORSの件

6-4 国際委員会設置の件

7. 編集関係

OR誌特集の予定

8. 支部総会報告

9. その他

9-1 会員増強の件

9-2 書籍・書類等廃棄処分の件

9-3 その他

入退会

入会(正会員)

市村 保雄 Centro de Estudios Tecnológico

上條 哲男 図書館情報大学

金子 郁容 一橋大学

熊谷 智徳 名古屋工業大学

高谷信一郎 ㈱山一証券経済研究所

谷口 里美 横河ヒューレット・パッカーD(株)

中田 高芳 防衛庁海上自衛隊

玉川 英則 新潟大学

森下 一男 香川大学

山岸 典子 日本電気(株)

山本 和夫 東邦チタニウム(株)

和田 恒雄 雪印乳業(株)

(学生会員)

青木 淳一 東京工業大学

清水富士夫 東海大学

田中 啓之 慶応義塾大学

田村 明久 東京工業大学

武田 晋 東京大学

藤井 秀人 京都大学

渡辺 康夫 慶応義塾大学

崔 文田 豊橋技術科学大学

退会(正会員)

新井 健, 安東康喬, 大沢 光,

加藤伸次郎, 鶴本良夫, 西本秀樹,

堀内佐武郎, 横尾孝義

(学生会員)

宮野 良

(賛助会員)

日本電信電話公社北海道電気通信局

日本電信電話公社 関東電気通信局

編集後記▶オリンピックに甲子園に猛暑, 消費電力はウナギ登り, テレビが見れなくなるかもしれないという報道が一時されました。毎日空気のように使っている電力ですが, 供給サイドにとってみると気が気ではない時もあるのです。効率的な電力運用のためにマーケティング

戦略が電力会社にも必要となってきました▶「パソコンとOR」といった特集への要望がモニターの方, 読者の方から多く寄せられています。時代の新しい流れの中でORがどのように生かされているか, 生かされるべきか, 編集企画を進めてみたいと思います。(J)

オペレーションズ・リサーチ

昭和59年9月号 第29巻(新シリーズ第9巻) 9号 通巻285号

代表者 近藤次郎

発行所 社団法人日本オペレーションズ・リサーチ学会
東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル
(電話 03-815-3351~2) 〒113

編集人 牧野都治

発売所 株式会社日科技連出版社

東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-2 〒151

本誌のご注文は直接

日本オペレーションズ・リサーチ学会へ

定価 850円(郵送料含)年間予約購読料 9600円(郵送料含)

本誌への広告お申し込みは明報社(571-2548), 日経弘報社(563-2241)へ